京都大学全学共通少人数セミナー　平成２１年度前期

科目名：　創造性とは何か？
担当教員名：　村瀬　雅俊
場所：　基礎物理学研究所
日時：毎週火曜日　第５時限
E-mail: murase@yukawa.kyoto-u.ac.jp
Tel: 075-753-7013:　Fax: 075-753-7010

第６回

進化ダイナミックスにおける自己・非自己循環原理の探求

― 構成的認識の理論と実践 ―（その５）

４－４．ユングの集合的無意識、チョムスキーの生成文法、そして環境汚染

人間には、「集合的無意識」という生得的な心的構造がある。このようなイメージ形式には、内容はない。しかし、私たちが具体的な経験に出会うことによって、はじめてイメージとして意識される。つまり、どのような内容がイメージ形式から出来上がるかは、その時々の時代精神に左右されるばかりでなく、どのような素材に慣れ親しむかにも依存する。そのため、はじめはイメージがあることさえ気づかない。科学的発見がなされるのは、こうしたプロセスなのである。

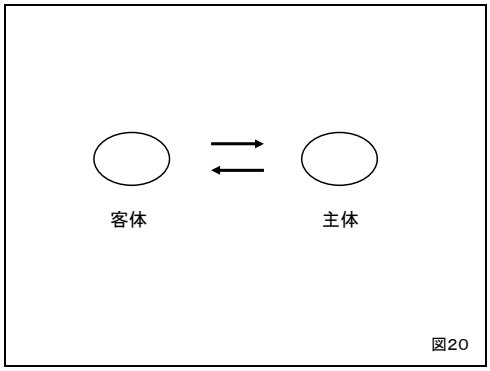

図20

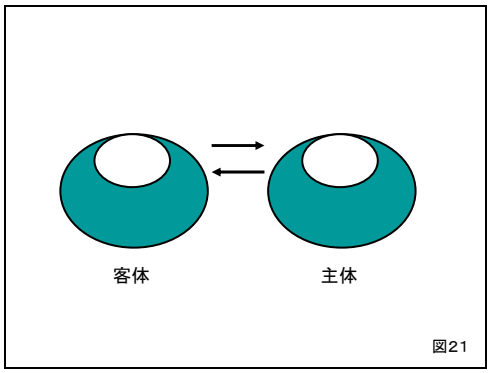

図21

これまでは、図２０のように、客体と主体は単純な構造として考えられてきた。しかし、主体と一言に言っても、意識できるレベルと意識できない無意識

レベルがある。しかも、無意識にはフロイトの言う個人的無意識とユングの言う集合的無意識がある。客体においても、意識できる対象と意識に上らない背景的な対象がある、という事実に注目しておく必要がある。そこで、重要なことは、図２１のように、客体にしろ、主体にしろ、階層構造が存在しているという点である。新しい情報は、そうした階層性からもたらされるという視点を忘れてはならない。

工学者の鈴木良次（1993）は「生物的自律性」という論考の中で、拘束条件を創出する仕掛けがあれば、従来の機械とは異なる‘自律的’な機械が可能であると述べている。その創出の仕掛けとして、鈴木は階層化された上位の拘束条件の必要性を指摘している。私が特に注目するのは、工学者の鈴木が心理学者であるユングの集合的無意識に言及している最後のくだりである。

つまり、われわれの行動は未熟なうちは意識的に行われている。ところが、習熟の度合いが高まるにつれて無意識的に行われるようになる。こうした個人レベルでよく体験されることが、集団レベルでも起こるとすれば、上位の拘束条件が無意識レベルに組み込まれた、と考えられるのではないだろうか。この集合的無意識に相当する仕組みが組み込まれれば、機械は生物的自律性を獲得するであろう、という主張である。

哲学者の市川浩（1993）は、「自律性」ではなく「自由」という言葉を用いて論考している。市川が指摘するのは、例えば、しゃべるときにはしゃべろうとする内容を考えるだけで十分で、舌の動きまで細かくコントロールしているわけではない。このコントロール不要によって、意識レベルは「自由」を獲得していることになる。しかし、その反面、完全にコントロールできないということに、心身分離の危機が潜んでいることになる。

意識がこうした自由を獲得する現実を、心理学の立場から論考したのが、ユング（1939）である。ユングが主張するのは、意識の一面性である。この特性は、意識それ自体の特性による。したがって、どんな意識も、同時に起こっている多くの表象の中から、ほんのわずかなものしか心にとどめることはできない。それ以外のすべての表象は陰に退くことになる。これが、心の分裂の危機となるというのである。

村瀬（2004、2005、2006）は、現代の汚染環境による認識不良の問題を取り上げている。認知科学では、「すべての人間の認知プロセスは、‘環境’によらずに基本的にみな同じである」という前提が置かれてきた（ニスベット、2003）。もし、この前提が間違っているとしたら？ 同じ対象を見ていても同じように知覚されず、私たちの世界認識の普遍性に対するこれまでの常識が一変してしまうのではないだろうか。‘環境’として、内部環境、外部環境、およびそれらの組み合わせが考えられる。図２２に模式化したように、人工物による環境汚

染とその認識過程への影響という現代的問題は、ユングの集合的無意識による認識過程への影響に匹敵する大問題である、と私は考えている。

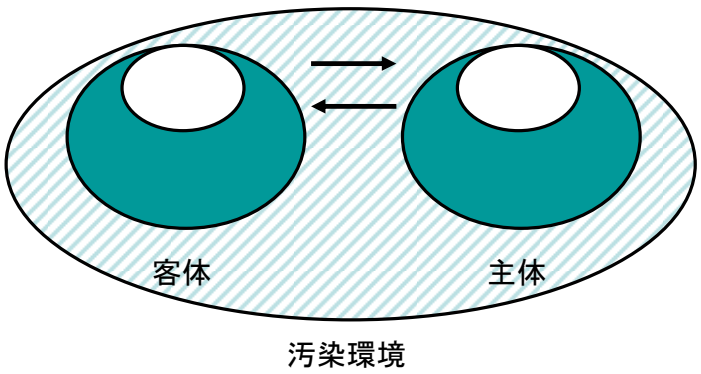

図22